

## 自分の「芯」

6年 M・Iさん

塾の帰りの夜七時、いつもの待ち合わせ場所に、母はいなかった。十分待っても来ない。携帯のメッセージにも反応がない。一体、何があったのか？恐怖と不安に駆られながら、いつも母が運転する道を家まで歩いた。途中すれ違う車が母であることを祈り、目をこらしたが、違うと分かる度に涙が出そうになった。家に戻ると母がいた。疲れて寝てしまっていたらしい。私は安心したのと怒りとで泣いてしまった。

私が親と離れて、怖い思いをしたのは、せいぜいこれくらいだ。この本に出てきた子供や先生が経験したこと、親が帰ってこないかもしれない、家族を亡くした友人がいる、家や、卒業式の晴着や全てを失ってしまった、大勢の避難者がごつた返す中で家族より目の前のことを優先しなければならぬ状況、そんなことは私には想像もできない。そんな中、普通に作っても大変な学校新聞を、電子機器も使わず手作業で作ったことに驚いた。これは生徒や先生にとって学校新聞や学校全体での「海よ光れ」の劇が、何があっても絶対にはやらない「自分の芯」になっているからだと思った。どんな状況にいても自信を持って周りに発信できること、貢献できることを自分と同じ学年の子供達が持っていたということが、すごいと思った。

では、自分にとっての「芯」はなんだろう。私は今、中学受験に向けて勉強している。ピアノも、九月の発表会に向けて一年前から譜読みを始め今は仕上げの段階だ。「与えられた環境の中で、自分ができることを一生懸命やる。」これが今の私の「芯」だ。私の第一志望の中学校は戦時中に空襲で校舎が焼けたが、またすぐに建て直し、常に女子教育の先端を担い、私が入学する年にはじめてたく百周年を迎える。私はそんな学校で沢山の事を学び、まだほんやりとだが医師になりたいと思っている。日本だけ取ってみても高齢化が進む中、ロボット技術やAI技術が発達しても医師という仕事は必ず「人の手」が必要だと思っている。また、災害が起きた時、必ず必要となるのも医師だ。みんなが非常事態で困惑する中で、自分ができることを常に考え、この本の子供のように、いつも通りにみんなに安心を与えられるような人になりたいと思っている。